

京都CF!

京都の大人の雑誌
仕入マガジン
[シー・エフ]

を創りたい人、
募集中!

現在、「京都CF!」では、編集制作のお手伝いをして下さる方を募集しています。「京都CF!」が好きな方、京の町を遊び回るのが好きな方、原稿を書きたい方、雑誌編集・デジタル編集に興味がある方、クーポンマガジン「HIENA KYOTO」の制作に興味がある方、ご応募下さい。

私達と一緒に「京都CF!」「HIENA KYOTO」を創ってませんか?

まずは郵送にて履歴書をお送り下さい。

●問い合わせ先

京都CF編集部
Helpmate募集係 担当 坂東(ばんどう)
〒604-8134
京都市中京区六角通烏丸東入ル 大輝六角ビル1F
E-mail: fmts@m21.or.jp

※今回の募集は社員募集ではありませんので
ご了承ください。

※今回電話でのご応募・ご質問は受け付けておりません
のでご了承ください。



映像&パフォーマンスユニット
「キュピキュピ」主宰、映像作家
石橋 義正
ISHIBASHI YOSHIMASA

京 TIAN I.D.
キョーティアンアイディ
The 112th person

【プロフィール】'68年京都市生まれ。京都市立芸術大学に在籍中。英国王立芸術大学映画科へ交換留学。'97年「狂わせたの!」で第8回日本映画プロフェッショナル大賞新人監督賞を受賞。'96年から始めたキュピキュピ活動の一方、個人としてもTVなどで活躍

ブラックユーモアが照らす 映像世界の冒険家のゆくえ



マネキンを役者として起用したTVシリーズ「オー!マイキー」。常に同じ表情でドラマが進むというシュールなユーモアは根強い人気でグッズも豊富



キュピキュピのライブ収録や石橋監督作品のビデオDVDは、HMVやタワーレコードなどの大手レコードショップで入手できる



主宰・石橋氏のほか、グラフィックデザイナー・造形作家・パフォーマーの4人で構成される「キュピキュピ」。4月にもミニライブを公演の予定

Information
■石橋作品のネット配信やグッズ購入
http://www.aill.co.jp/contents/vpn/_data/index.html
■キュピキュピ公式ホームページ
<http://kyupikyup.com>
■キュピキュピ・ファンD
<http://www.pan-kyoto.com/ac1928/>

一度でも「キュピキュピ」のパフォーマンスを見たことがある人なら解ってもらえるだろうが、この集団をカテゴリー的に説明するのは誠に難しい…。徹底的なブラックユーモア、ギラギラとしたエキセントリックな映像と衣装、それを自らせせら笑うようなアコースティックなギミック…などとショーの特徴や印象を挙げれば挙げるほど、人は首を傾げる一方で弱ってしまう。だがその圧倒的なオリジナリティはまさに体で感じるべきもの。観た後はしばらく夢に出てくるような、超現実的な強烈さを持っている。

石橋氏は、それらの演出と映像を担当するディレクターだ。個人としての活動でも「オー!マイキー」や「パミリオン・プレジャー・ナイト」のTV番組で持ち前のナンセンス世界を構築している。

映画監督になりたいという少年時代の夢を叶えるためにロンドン留学で映画を学んだ彼は、卒業後、商業ベースの映像からアーティストとしてのスタンスに切り替えた。他の誰も、そして自分さえもが未踏のテイストに向かう、彼一流の冒険である。そこには熱い思いがたぎってはいるものの「作品で何かのメッセージを伝えようとはしてない。とにかくエンターテインメントでありたい」と物静かに語る。動力はあくまでも観客がぐっすりと笑う反応。観る者を置いてきぼりにするような独善性はまるでない。だが、類なき世界を見せながら感情の共有を実現するには、相応の実力と感応を醸成するセンスが必要なのだ。石橋氏のその才能は、ニューヨークやパリといったアートの街で既に高い評価を得ていることでも証明済みといえるだろう。

「イメージーションを叩かたちに出来るから」と、短編の制作に魅力を感じるという。それは今後浸透するであろう、ネット配信を想定した結果でもある。また、そうした小品群からなるTVシリーズは「子供も老人も見ますからねえ」と解りやすいスタイル。その番組は若手クリエイターの発表の場としても機能することで、受け手と作り手がともに少しずつ発展していくメディアとなる。

中京区のカフェ兼小劇場・アートコンプレックス1928が'03年秋に実施した「キュピキュピ・ファンD(愛称)」もその展開の一つだ。可愛げな響きを持つこのシステムは、アートコンプレックスで行われたキュピキュピのロングラン公演を、一丁2万円で購入したもので、ファンによる応援基金のような意味合いだけでなく、観客動員数によっては出資者に配当金を還元することもできるビジネスの側面も持つ。今後も予定されるこのファンDをはじめ、沢山の冒険とそれに応える人や街の音が響きあって、確実に石橋氏の舞台である「あたらしい映像産業」はすこやかに育ちつつあるのだ。